知的事例１　両親の高齢化による「親亡き後」を考えた利用者の対応事例

事例概要

中原みゆき様（仮名）　３７歳女性。障害支援区分：３

障害種別は知的障害で療育手帳のＡ１を持っており、ダウン症である。（障害支援区分は３）

昭和 53 年、山梨県で生まれる。３ヶ月健診後に保健師のアドバイスがあり、総合病院を受診し、ダウン症の診断を受ける。４歳の時に父の仕事の関係で山梨県から千葉県市原市に転居。５歳時には脳波に異常がある事がわかり都内の病院を受診。てんかんの薬を服用することとなった。市内の小学校を卒業後は、養護学校の中等部と高等部を卒業し、市原市が運営している福祉作業所「なぎさ福祉作業所」に通う。

現在は両親と３人暮らし。妹は結婚し近所で暮らしている。日中は「なぎさ福祉作業所（現在は就労継続支援Ｂ型事業所）」に元気よく通っている。

今のところ生活する上で困っている事はないが、両親も高齢になり親亡き後の本人の生活に不安を感じている。姉妹の仲は良く、妹は直接的な介助は難しいが、親亡き後は、自分が姉を見て行くつもりでいる。当面は、現状の生活を続けたいというのが本人や家族の希望である。

ポイント

① 本人は現在通所している作業所に通い続け、月 2 回のカラオケクラブに参加する等、生活スタイルに満足している様子がうかがえ、現状には問題ないように思える事例ではあるが、両親の高齢化による不安要素があり、これらにどのように対応していくかを考える必要がある。

② 両親は７０歳と６９歳という高齢になってきたが、元気なうちは本人のお世話をしたいと考えている。しかし、両親が亡くなった後の生活には不安を感じており、その時には妹に迷惑をかけたくない気持ちも強い。妹自身は親亡き後は、本人のお世話をするつもりではいるが、どこまでできるかは不安であり、今のうちに親亡き後の生活を描いておければと考えている。また、福祉制度の知識がないことも不安要素となっている。